

# Souseki 夏目漱石 ☉ 森鷗外 Ohgai

Junko Higasa 2013.5.15 記

明治の文豪というと比較されやすいが、タイプの異なる二人である。  
 生まれた時に既に存在する環境がある。他人が、自分が作り上げる環境がある。  
 誰かのために諦めなければならない生き方がある。自分のために突き進める生き方がある。  
 人の好みはそれぞれだけれど、自分の人生を生き抜いた二人はそれぞれに素晴らしかった。

| 夏目漱石  | 森鷗外   |
|---|---|
| 1867.2.9~1916.12.9  | 1862.2.17~1922.7.9  |
| 新宿の町方名主の家に生まれるが、家の事情で養子に出されてから再び実家に戻る。  | 津和野藩士の御殿医を務める森家の嫡男として生れ育った。   |
| 末っ子。子供の頃から期待されない分、束縛も少なかったが、自分の人生は独自に築かなければならなかった。しかし兄たちが亡くなり親族に頼られた。   | 長男。家督相続の役目があり、自分一人だけの人生を考えて生きる訳にはいかなかった。立場上、親・兄弟への配慮も必要だった。   |
| 日露戦争徴兵を逃れるため北海道へ一時転籍。   | 日露戦争に陸軍軍医として同行。   |
| 現:東京大学文学部卒業。博士号辞退。<br>「英語を学べ」とロンドンに給費留学を命じられるが、「英語は日本でもできるから、英文学を学ぶなら」と渋々承諾し、ようやく期間満了にて帰国。                                    | 現:東京大学医学部卒業。医学博士。文学博士。陸軍の衛生制度・環境を調べるためにドイツ留学を命じられ赴くが、現地で恋人ができた。しかし国の命を受け、友人に諭されるままに帰国。                                    |
| 帰国後、東大英文学講師。<br>倫敦で研究が大成した「文学論」の講義は難しすぎて評判が悪かったが、率先して行ったシェイクスピアの講義は人気を博した。勤務と並行して作家の地位も確立し、目前の教授の地位を振って、新聞社の誘いに応じて契約し専業作家となる。 | 帰国後、陸軍勤務。軍医。<br>ドイツで学んだ医学を生かそうと研究所創設を考えるも「ドイツ語の書を翻訳せよ」と命じられ、翻訳の仕事に従事する。医師としての自分の研究にも、小説の執筆にも十分な時間が取れなかった。自ら陸軍を辞めて執筆に専念する。 |

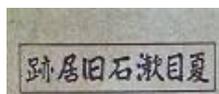
## 10年という期間に集中的に傑作を残す

|   |   |
|---|---|
| 二男五女(五女夭折)の父親。<br>現代的な妻に対して、家長としての威厳を何とか保つ。才能ある弟子を多く輩出したので「漱石山脈」と呼ばれた。世間から見て頑固、生真面目。<br>金銭的には、足りなければ稼ぐ立場。     | 三男二女(次男夭折)の父親。<br>旧家の家長として家を守り、家族に気を配り保護する。弟子は持たなかったが文人との交流が盛んだった。世間から見て穏やか、親しみやすい。<br>金銭的にはあるものを維持する立場。      |
| 女性に対しては、結果として才能を現した人を認めるタイプ。  | 与謝野晶子、平塚らいてう、といった才媛を積極的に応援したフェミニスト。   |
| ただの「夏目某」として生きたい。<br>兄弟が多い中で、子供の頃から余計者扱いされて、世の中に必要とされる人間になろうと決心する。そして欲に流されず人間として正しく、一個人として自分の人生を作ることを目指し突き進んだ。 | 「森林太郎の墓」それ以外書いてはならぬ。<br>世の中には個人の方ではどうしようもないものがあるという体験から、常に世間の中の自分であり続けたが、自分は誰でもない「森林太郎」という一個人であるという思いは捨てなかった。 |

もし、二人の個性が逆だったら、もし二人の環境が逆だったら—それは考えても詮無いことだ。世の中には似たような人生はあっても、誰一人として同じ人生はない。こういう環境だったらこうなれたという保証もない。生まれた年代、生きている時代、持っている性質、培っていく性格、与えられた環境、作り上げる環境、その組合せは複雑に絡み合い、一つの人生が出来上がっていく。そのルートは千差万別だ。自分は一体どのように生きていけるのか。人生の善し悪しはない。唯人間として正しく生きる。幸不幸は他人の判断ではなく自分の基準の中にあるのだろう。少なくとも一人の人間として生まれたからには、自分という一個人でありたい。誰にでも「生活」がある。そのしがらみと葛藤の中で二人は歩み、最終的にそれぞれの生き方とは対照的に、漱石は「則天去私」に、鷗外はようやく「森林太郎」本人に返った。  
 漱石は生涯借家住まいで千駄木—西片—早稲田南町と居を移したが、千駄木時代に住んでいた家から1ブロックほど坂を下ると、「観潮楼」と呼ばれた鷗外の家(現:森鷗外記念館)がある。



漱石旧居跡の  
 ←塀の上を歩く猫の像  
 明治36年3月~39年12月  
 漱石が住んだ場所を示す  
 石碑上部↓



観潮楼に当時のまま残る  
 銀杏の木と石→  
 陸軍省へ出勤する鷗外の  
 踏みしめた門前の敷石↓

